

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25284059

研究課題名(和文) イギリス・ヘリテージ映画とナショナル・アイデンティティに関する文化史的研究

研究課題名(英文) Cultural Historical Researches on the English Heritage Film and National Identity

研究代表者

新井 潤美 (ARAI, Megumi)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：70222726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,000,000円

研究成果の概要(和文)：1981年の『炎のランナー』以降、サッチャー政権下のイギリスは、のちにヘリテージ映画と呼ばれることになる多数の映画を生み出していく。代表的なヘリテージ映画を解釈しながら、それらの映画がどのような主題的、映像的、イデオロギー的特徴を共有しているのかを具体的に議論した。その一方で、ヘリテージ映画にかんする代表的な批評論文(とくにアンドリュー・ヒグソンのもの)を読み、自分たちが進めてきた個々の映画の作品論に照らして、その一般的な定義を批判的に検証し、それがもつ問題点をあぶり出すとともに、ヘリテージ映画にかんする新たな定義にむけて議論を重ねた。

研究成果の概要(英文)：1. Chariots of Fire, released in 1981, was the first of a series of films which came to be known as 'heritage films' released under the Thatcher administration. We examined several works which are regarded as representative of the genre, and discussed in detail the thematic, visual and ideological characteristics these films can be said to have in common.

2. We also read several leading works of criticism on the subject (including those of Andrew Higson), and carried out a detailed analysis and criticism of those works, based on our own theories which we developed in the course of our research. We were thus able to clarify the problems and weaknesses apparent in the definitions presented in those works and conducted research and discussions in attempt to come up with a new, valid definition of the heritage film.

研究分野：英米文学

キーワード：ヘリテージ映画 ナショナル・アイデンティティ ポストヘリテージ映画 オルタナティブ・ヘリテージ映画 アンチヘリテージ映画 カントリーハウス サッチャリズム 観光

1. 研究開始当初の背景

サッチャー政権とともに立ち上げられたヘリテージ産業の一環として制作されたヘリテージ映画は、はたしてどのように定義されるのか。それはサッチャー政権の国家像(ナショナル・アイデンティティ)とどのような関係にあるのか。命名者のアンドリュー・ヒグソンの定義は、はたしてヘリテージ映画の特質を説明できているのか。研究開始当初、ヘリテージ映画の定義に関わる問題は未解決であり、そのようなジャンルが成り立つかどうかを問う必要が感じられる状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、映画分析的なアプローチを総合的に用いることによって、1980年代以降のイギリス映画の中心的地位を占めることになったヘリテージ映画を、とくにヘリテージ映画のなかで表象されているナショナル・アイデンティティの諸相を中心にして文化史的観点から総合的に論じる。それと同時に、ヘリテージ映画の多くがイギリス小説のアダプテーションであることから、映画研究と文学研究とを交り多いかたちで接合するものとしてのアダプテーション研究にも力を注ぐ。

3. 研究の方法

1年目から4年目までは年5回程度の研究会を開催し、ヘリテージ映画にかんするプレゼンテーションと、それにつづくディスカッションをとおして、個々のヘリテージ映画の分析を共有するとともに、ヘリテージ映画の定義にかんする問題点を検討した。最終年は、それまでの成果を外部にむけて発信することに努めるとともに、最終シンポジウムを開催し、それぞれがヘリテージ映画とは何であったのかを総括した。

4. 研究成果

各メンバーがどのような映画作品をどのように解釈したかは、次項の「主な発表論文等」、各年度の研究実績報告書の「研究発表」欄を参照していただきたい。ここでは研究代表者をはじめとして、一部のメンバーの研究内容を記述することとおして、研究会全体の研究の方向性を示したい。

1) 新井潤美(研究代表者)

イギリスのヘリテージ映画とナショナル・アイデンティティの問題、そしてヘリテージ映画の多くの原作がイギリスの小説であることから、小説、戯曲のアダプテーションの研究を行った。

2013年には、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』における「イギリス的」と見なされる要素の解釈と受容に関する考察を行ない、2014年にはエリザベス・ギャスケルやジェローム・K・ジェロームの作品をと

りあげ、ヘリテージ映画研究に不可欠である、イギリスにおけるナショナル・アイデンティティと階級の研究を行った。

2016年においては、ヘリテージ研究の一環として、英国ヴィクトリア朝における王室のイメージ、教育、出版、写真、美術、慣習の歴史的かつ文化的背景を考察し、さらに、階級における上昇の手段としての教育をテーマとして、「紳士」のコンセプトを形成し、英国における「紳士像」に大きな影響を与えた「パブリック・スクール」の歴史的背景をたどり、文学および文化におけるその表象を分析した。

2017年度には文学作品のアダプテーションに目を向け、文学作品の映像アダプテーションの教育的、文化的効用と影響、異文化間の理解とテキストの共有という視点から研究を進めるとともに、階級研究として、文学における「ロマン主義」の台頭とその人気と受容がアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスの湖水地方観光にどのような影響をあたえ、その影響がどのように広がったかを旅行記、回想記および文学作品を通して考察した。さらに「カントリー・ハウス」について、それが「個人の家」でありながら、「国の共有財産」としてみなされていく歴史的、文化的過程をたどり、「観光」、「ヘリテージ」、「階級」の関係を、文学作品における表象も考察の対象としながら、その実態とイメージを分析した。

2) 松本朗(研究分担者)

イギリスの文化的遺産(ヘリテージ)の重要な一端を担うとされるイギリス文学の作品を原作とする映画テキストを、(i) 小説テキストの先行研究、(ii) 映画テキストの先行研究、(iii) イギリス映画産業史、(iv) イギリス文学のアダプテーション史、の4点を観点に歴史化した上で、映画テキストを分析し、その独自性を明らかにすることによって、ヘリテージを成立させる要素について示唆を得ることを目指した。

分析の対象とする映画テキストとしては、ヘリテージ映画が製作される1979年までのイギリス映画産業史の大きな見取り図を得ることを目的に、(a) ヘリテージ映画が登場する前夜に製作された、トマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』(1891)を原作とするロマン・ポランスキー監督の『テス』(1979)と、(b) イギリス文学の正統なヘリテージを体現する作品とは見なされない、ミドルブラウ向けのリベラルな作品、つまりヘリテージの裏側に位置づけられる、ウィニフレッド・ホルトビーの『サウス・ライディング』(1936)を原作とするヴィクター・サヴィル監督の『サウス・ライディング』(1938)を選択した。

2019年3月刊行予定の論集『イギリス文学と映画』(三修社)に収録される論文「パナヴィジョン・アダプテーションからヘリテ

ージ映画へ——ロマン・ポランスキー監督の『テス』では、『テス』が、1970年代後半に映画研究で議論されたメロドラマというジャンルの一部と見なせることを明らかにした上で、『テス』において萌芽的にあらわれるこのメロドラマ映画のスタイルが、1980年代のヘリテージ映画においては支配的なものとしてあらわれると考えられることを指摘した。

2018年3月刊行の論集『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』（中央大学出版部）に収録された論文「一つの世界の市民」としての映画観客——『クローズアップ』誌と映画『サウス・ライディング』にみられるブラウの戦い』では、映画の定期刊行物『クローズアップ』誌上で1920年代後半に見られたブラウの戦いについて確認した後で、映画『サウス・ライディング』が、アメリカ合衆国との映画をめぐる経済戦争に1930年代のイギリスが敗れたことをあらわすテキストでありながら、ヴィクター・サヴィル監督はもう一方では、ハリウッド的なエンターテインメントとしての映画の手法を用いない、映像テキストを分析的に見る力を労働者階級と下層中流階級の観客に取り戻させるヨーロッパ的な映画製作を意識していたことを明らかにした。

このようにヘリテージ映画について考察する作業から浮かび上がるのは、1979年以前も、以降も、イギリス文学のテキストを原作とするアダプテーション映画が、イギリスとアメリカ合衆国とヨーロッパの政治・経済・文化をめぐる闘争の場であった可能性であり、これまでの歴史のなかで、イギリスのヘリテージ映画的なものが、その意味の交渉と再定義を繰り返しつつ、循環してきた可能性である。とはいえ、今後は、文学研究と映画研究の中だけで映画の役割を考えるのではなく、ロバート・ヒューイソン『文化資本——クリエイティブ・ブリテンの盛衰』（美学出版）が論じるとおり、ヘリテージが国家の文化政策として利用される側面とそれに伴う映画産業および映画の質の変容についても、意識する必要があるだろう。

3) 佐々木徹（研究分担者）

映像分析を中心的な主題として、「ヘリテージもの」のTVアダプテーションを研究した。その成果を以下にまとめる。

Evelyn Waughの*Brideshead Revisited*を例にとると、1981年のグラナダテレビ版は名所カースル・ハワードを効果的に舞台として用いていたが、当時のテレビ映画には付き物の単調な照明が端的に示すように、平板なカメラワークに終始していた。対して、2008年の劇場映画版はふたたびカースル・ハワードを舞台にしなが、傾いたフレームの利用や濃淡のコントラストを強調した画面で、さまざまなムードを表現しようとして

いる。しかし、いくらベテラン Andrew Davies が脚本に工夫したところで、主人公チャールズの複雑な心理や、マーチメイン一家のカトリック教信仰の底の深さを描き切る時間が無いのが致命的であった。

30年前とは異なり、現在のテレビ版のアダプテーションはフィルム・ストックの質の向上等、高度な映像技術が活かせるようになっている。ディケンズの『荒涼館』はペーパーバックで1000ページになんなんとする大長編であるから、通常の商業映画の2時間枠には到底おさまらない。テレビドラマはこの点、たっぷり放映時間があるので、はじめて「まともな」アダプテーションが可能になる場を提供した、と言ってよいだろう。1985年版はダイアナ・リグをはじめ、キャストिंगがよく、すぐれた作品ではあったが、映像がやはり単調であった。これと比べると、Andrew Davies がシナリオを担当した2005年版は俳優に物足りなさがあるものの、先のアダプテーションが、遅々として進行しない大法官裁判所の訴訟、ならびにこれを恰好の金蔓とする弁護士たちの狡猾さを強調し、拝金主義が力をふるっていた1980年代の風潮を批判することに力点を置いていたのに対して、エスターを物語の中心に据えて、彼女の人間としての成長を社会批判よりも前面に打ち出している。そして、このシナリオを、単に彼女の出番を多くするだけでなく、彼女の視点を採用した主観ショットを頻繁に使ったり、彼女を画面の中心に置いた構成を多用する、といった映像表現上の工夫が効果的に支えている。また、“dark plates”が有名なオリジナルのイラストレーションを彷彿させる暗い画面の挿入も表現を豊かにしており、質の高いアダプテーションを作り出すことに成功している。

4) 小山太一（研究分担者）

ヘリテージ映画というジャンルは劇映画の中でもとりわけ場所をめぐる展開されるドラマであり、その特定の場所の定義について織り紡がれるテキストであるというのが、この5年間にわたる考察の中核的アイデアである。この報告では、その成果として行われた2016年と2017年の発表を中心に述べる。

2016年には、ジョー・ライト監督の映画『プライドと偏見』（ジェイン・オースティン原作）および『つぐない』（イアン・マキューアン原作）を取り上げ、それぞれがフィーチャーしている「大きな家」と「小さな家」の機能について考察した。『プライドと偏見』においては下級ジェントリ階級の一家の住居たるロングボーンから伝統的上流階級の富の象徴たるペンバリーへ、『つぐない』においては上級ブルジョア家庭の住居たるタリス邸からロンドンの下宿/海辺のコテージへという引越しが物語におけるロマンティック・ラブの完成と平行線を描い

ている。それらの家(庭)表象がイングリッシュ・ヘリテージの概念といかに関連しているかを、原作と対比しつつ論じた。

2017年には、アラン・ブリッジズ監督の『戦場の罨』(原作はレベッカ・ウェストの『兵士の帰還』)をとりあげ、帝国主義的ディシプリンおよび倫理を(二重の意味でフィクショナルに)象徴するカントリー・ハウスの表象がいかにして構築されているかを論じ、サッチャー政権時代の初期にこの映画が制作されたことの意味を考えた。このカントリー・ハウスに「帰還」する主人公は第一次世界大戦の戦場でシェル・ショックになり、屋敷の当主としての義務を背負うようになって以降の記憶をすべて失っている。男性性に深刻な損傷を抱えた彼は戦時下の邸にとって招かれざる外部であるとともに、戦争を内面化した邸のエートスがもういちど取り込み、ナーシング/再教育によってふたたび兵士に仕立て上げて送り出さなければならない存在でもある。主人公と邸との関係の二重性が映像によっていかに表象されているのかを、テキストと映像を引きつつ論じた。

5) 丹治愛(研究分担者)

ヘリテージ映画は、1980年代以降、サッチャリズムという強力なイデオロギー的磁場のなかで制作された一連の映画である。「第二次世界大戦以前の過去」に物語を設定しているため、コスチューム・フィルム/ピリオド・フィルム(時代劇映画)のジャンルということになるが、そのなかで以下のような共通の特徴をもっていると言われる。

(1)ヘリテージ映画は、第二次世界大戦以後の英国が体験した大きな政治的・経済的・社会的変化などによって、イングランド/英国のナショナル・アイデンティティが掘り崩されつつあるという不安と動揺のなかで、その強化ないし再構築のためにサッチャーが打ち出した反動的な世界観と歴史観、とくにそのヘリテージ戦略になんらかの関連をもっている。

(2)物語の場所はイングランドを中心とした英国に設定されることが多いが、たとえば『インドへの道』のように、英国人が登場すれば外国ということもありうる。

(3)物語が設定される時代としてとくに多いのは、「現代の支配的なイングランドのナショナル・アイデンティティが形成された」1880年から1940年までの時代(作家ではハーディ、H・ジェームズ、E・M・フォースター、ウォー)である。つぎに多いのが「国家創世」のエリザベス朝時代であり(作家ではシェイクスピア)また、「ナショナル・ヘリテージの表象を提供する時代としてきわめて重要な」摂政時代(作家ではジェイン・オースティン)である。このように、文学的ヘリテージとしての英文学の正典的作品を

原作とすることが多い。

(4)ヘリテージ映画は、過去を商品化しようとするサッチャー政権のヘリテージ戦略と連動して、階級的にはアパー・クラスかアパー・ミドル・クラスを中心に、カントリー・ハウスとその周辺の田園風景(とくに南イングランド的な風景)を、時代考証的な正確さをもって、また、ロング・ショットを多用した美しい映像をとおして、ノスタルジックに表象する傾向が強い。それは、都市化・多民族化の反動として田園主義的イングランド像を愛好するという意味でリトル・イングランド主義的である。

(5)その一方で、「帝国」から「福祉国家」へという第二次大戦後のナショナル・アイデンティティ変容の反動として、第二次大戦以前の過去との連続性のなかに国家の現在を位置づけ、またそこに将来への国家の可能性を模索しようとするサッチャーの国家観と歴史観としばしば連動し、「おおむね無批判な帝国のイメージを利用」している。その点においては帝国主義的/ラージ・イングランド主義的である。

(6)ヘリテージ映画は、イングランドの過去を、その歴史的コンテクストから切り離して、「イメージの膨大なコレクション」として表象する傾向にある。そのような「ヘリテージ的衝動は[中略]サッチャーの英国に限定されるものではなく、ポストモダン文化の示差的特徴である」。したがって、それは英国だけのジャンルではないし、ブレア政権が誕生した1997年をもって終わったジャンルでもない。

こうしてヘリテージ映画は、サッチャー政権下の田園主義的・帝国主義的ナショナル・アイデンティティとの共振のなかで創出され、「福祉国家の水平化の傾向にたいする、貴族的反動的ノスタルジアの勝利を表象する」ヘリテージ文化の反動性の表現であるとしばしば批判されることになる。しかしその一方でそれはしばしば、文学的ヘリテージとしてのディケンズ、ハーディ、フォースター等の社会批判的な作品を原作として用いている。

サッチャーによって文化事業の補助金を削減された、かならずしも保守的ばかりではない映画製作者たちが、かならずしも保守的ではない作家の作品を原作として、サッチャー政権のナショナリスティックな国家観やノスタルジックな歴史観を従順に反復する映画を製作するなど、はたしてありうるのだろうか。ヘリテージ映画は、そのようなことを可能とするどのような共通の方法論をもっているのだろうか。

この問いにたいして大胆なくらいシンプルな解答を提示しているひとりは、「国家の過去の再現/表象 ヘリテージ映画におけるノスタルジアとパステイッシュ」(1993)におけるアンドルー・ヒグソンだろう。彼に

よれば、ヘリテージ映画のなかでは、原作がふくんでいる「批判的パースペクティブ」は、美しい「装飾」的映像によって無力化されている。たとえ「映画のナラティブ」が、原作にふくまれる「アイロニーや社会批判を暗示」したとしても、「ノスタルジックなまなざしを誘うスペクタクル」——「都市化や工業化という近代化の動向に汚されていない南イングランドの柔らかい牧歌的風景」——がその批判を打ち消してしまっているのである。

要するに、ヘリテージ映画とは、たとえ原作のナラティブが「急進的な意図」をもっていようと、ロング・ショットやミドル・ショット、ディープ・フォーカス、そして時代考証的な正確さをもってゆっくりと提示されるスペクタクルという、ナラティブ的には「機能しない余剰」——その構成要素はカントリー・ハウスと田園風景、建物内部の装飾やファッション——によってその「急進的な意図」が「妨害」され、その結果、「機能」から切り離されたヘリテージ的空間を出現させている一連の作品のことなのである。

しかし、以上のようなヘリテージ映画の定義は、現在では破綻していると言わざるをえない。ヒグソン自身が2003年出版の『イングリッシュ・ヘリテージ、イングリッシュ・シネマ』において、この定義を修正しているからである。すなわち、スペクタクル（視覚的壮麗さ）とナラティブとの「緊張関係」のなかで、かつてスペクタクルに圧倒的な力の優位をあたえていたヒグソンは、ここではナラティブにもスペクタクルと拮抗する力を認め、かならずしもサッチャリズムと「共鳴」しない、「リベラル・ヒューマニズム的なヴィジョンを提示」するヘリテージ映画の可能性を認めるようになってきているのである。

この修正ははたしてヘリテージ映画の定義の問題を解決したと言えるのだろうか。それとも、ヘリテージ映画の定義を多様化することによって、それを曖昧化しているだけに終わっているのか、そうだとしたら、どのような新たな定義が可能なのか——これが本研究会のすべての議論の背後にあった根底的な問いだったと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計31件)

新井潤美「岩や山に比べれば——ジェイン・オースティンと「観光」」、『比較文学研究』第103号、東大比較文学会、査読有、2017年、69-83

丹治愛「ウィリアム・モリス『ユートピアだより』 ナショナル・ヘリテージとしてのイングランドの田園」、『英文学研究 支部統合号』第9号、日本英文学会、査読有、2017

年、99-106

Toru Sasaki (佐々木徹) “What Estella Knew: Questions of Secrecy and Knowing in *Great Expectations*” *Dickens Studies Annual* 査読有 Vol. 48. 2017年、181-90

西川克之「イメージの呪縛を解くために：美瑛における「観光のまなざし」の向こう側」、『CATS 叢書』11巻、査読無、2017年、47-53

丹治愛「ハーディと田園主義的イングリッシュユネス 其の概念の構築と脱構築」、『ハーディ研究』第42号、日本ハーディ協会、査読有、2016年、1-20

松本朗、「“Yes, you’ve wonderfully good taste, Ernest.”——『真面目が肝心』とガール・カルチャー」、『オスカー・ワイルド研究』第15号、日本ワイルド協会、査読有、2016年、55-69

丹治愛「ナショナル・アイデンティティの変遷 オースティンとフォースターのあいだで」、『ギヤスケル論集』第25号、日本ギヤスケル協会、査読有、2015年、1-30

Toru Sasaki (佐々木徹) “Dickens and the Blacking Factory Revisited” *Essays in Criticism* 査読有 Vol. 65 No. 4, 2015年、401-20

Toru Sasaki (佐々木徹) “Back to Owl Creek Bridge: Robert Enrico’s Adaptation Reconsidered” *Style* 査読有 Vol. 49 No. 2, 2015年、181-95.

〔学会発表〕(計33件)

Toru Sasaki (佐々木徹)、“Esther’s Narrative” レスター大学ヴィクトリア朝研究所50周年記念シンポジウム “Celebrating Dickens” (2017年11月22日、連合王国レスター大学)

Hogara Matsumoto (松本朗) “The Girl Problem in the Interwar Periodicals”, The Sixth Annual Conference of ESPRit (European Society for Periodical Research) (2017年6月28日、IULM University Milan, Italy)

丹治愛「ヘリテージ映画と国家のイメージ——イシグロ『日の名残り』」、『日本英文学会関東支部 第14回 (2017年度夏季大会) (2017年6月17日、明治学院大学)』

小山太一、「回帰するノさせられる記憶——The Return of the Soldier とヘリテージ映画の関わり」、『日本英文学会関東支部 第14回 (2017年度夏季大会) (2017年6月

17日、明治学院大学)

新井潤美「イギリスのカントリー・ハウス観光と文学」、名古屋大学英文学会第56大会(2017年4月15日、名古屋大学)

Toshio Kusamitsu (草光俊雄)、「Life-writings in the Long Eighteenth Century: Consuming Private Lives and the Rise of a Consumer Society」消費文化史国際研究会(2017年3月23日、学習院大学)

佐々木徹「小説と映画について」、日本英文学会九州支部大会(2015年10月25日、佐賀大学)

新井潤美「イギリスのカントリー・ハウスと文学」、第31回甲南英文学会定期総会・研究発表会講演会(2015年7月11日、甲南大学)

佐々木徹「小説と映画——ピアスの『アウル・クリーク橋』」、日本アメリカ文学会東京支部大会(2015年4月11日、慶応義塾大学)

新井潤美、「Elizabeth Gaskell の *Wives and Daughters* における階級観」、サウンディングズ英語英米文学会第66回研究発表会特別講演(2014年5月10日、上智大学)

〔図書〕(計18件)

松本朗 他『イギリス文学と映画』岩田美喜他編、三修社、2019年3月出版確定、ページ番号未定

松本朗 他、『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』井上ちとせ他編(中央大学出版部、2018)444(265-292)

新井潤美 他『文学とアダプテーション——ヨーロッパの文化的変容』小川公代他編(春風社、2017年)370(92-111)

新井潤美 他『ジェイン・オースティン研究の今——同時代のテキストも視野に入れて』日本オースティン協会編(彩流社、2017年)396(267-80)

新井潤美、丹治愛 他『教室の英文学』日本英文学会(関東支部)編(研究社、2017年)334(123-29, 108-14)

新井潤美『魅惑のヴィクトリア朝——アリスとホームズの英国文化』NHK出版、2016)221

新井潤美『パブリック・スクール——イギリス的紳士・淑女のつられかた』(岩波書店、2016)215

草光俊雄『歴史の工房——イギリスで学んだ

こと』(みすず書房、2016)288

小山太一 他、『芸術におけるリライト』海老根龍介他編(弘学社、2016)214(177-190)

松本朗 他『終わらないフェミニズム——「働く」女たちの言葉と欲望』日本ヴァージニア・ウルフ協会編(研究社、2016)350(59-84)

丹治愛、小山太一 他『一九世紀「英国」小説の展開』海老根宏他編(松柏社、2014)457(67-88, 114-35)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 潤美 (ARAI, Megumi)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：70222726

(2) 研究分担者

草光 俊雄 (KUSAMITSU, Toshio)
放送大学・教養学部・客員教授
研究者番号：90225136

丹治 愛 (TANJI, Ai)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：90133686

佐々木 徹 (SASAKI, Toru)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30170682

西川 克之 (NISHIKAWA, Katsuyuki)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究科・教授
研究者番号：00189268

松本 朗 (MATSUMOTO, Hogara)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：00365678

小山 太一 (KOYAMA, Taichi)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：00406670

(4) 研究協力者

加藤 めぐみ (KATO, Megumi)
都留文科大学・文学部・准教授
研究者番号：70717818

前 協子 (MAE, Kyoko)
日本女子大学・非常勤講師

安藤 和弘 (ANDO, Kazuhiro)
東京外国語大学・非常勤講師